

くり クリシギゾウムシについて



図1 クリシギゾウムシ成虫



図2 老熟幼虫の脱出孔（赤丸内）

1 生態

クリシギゾウムシの成虫は体長5～8mm、体色は暗褐色で淡黄白色の毛が密生している。本虫の特徴である成虫の口吻は光沢がある黒褐色で、細長く、少し内側に曲がっている。本虫は生涯をくり園やクヌギ林内で生活する。

幼虫は脚がなく胸部が肥大した紡錘形なので他のゾウムシ科の幼虫と区別できる。若齢幼虫期は乳白色であるが生育すると淡黄色となる。老熟幼虫の体長は約12mmである。

越冬は幼虫で行い、約2週間の蛹期間を経て成虫となる。成虫の生存期間は約10日で、その間に樹上で交尾を行い産卵する。雌成虫はくり球果の上から果実に産卵管を刺して果皮に小さな穴をあけ、果皮と渋皮の間に1球果あたり3～4卵ずつ産下する。卵期間は約10日で、孵化後幼虫が果実を食害する。孵化後およそ20日をかけて老齢幼虫となる。幼虫は10月中旬頃から果実を脱出して土中20～30cmの深さに潜り、越冬する。その後蛹化するが、蛹化するまでの期間は1～4年と個体差が大きく、その理由については不明である。

若齢幼虫は果実の渋皮に沿って食害し、齢が進むにつれて果実の内部を食害する。食害した跡には細かい虫糞が充満しており、果外に糞をださない。被害果は最初、果皮の色に変化は見られないが、食害が進むと果皮が黒くなり、食害されたことがわかる。10月中旬以降になると老熟幼虫が脱出した丸い穴が果実にあいているので食害の有無が分かる。

2 発生状況

成虫は7月下旬～9月中旬にかけて羽化して交尾するため、くり園にはこの時期に多く飛来する。7月上旬から下旬にかけて降雨が少ない年は蛹化する数が少ないため、成虫の発生量も少ない。果実の被害は収穫時期の遅い品種や標高の高い園で多い。

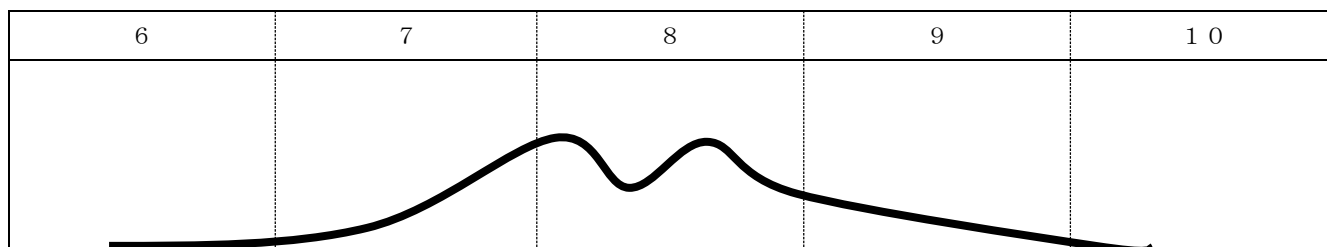


図2 クリシギゾウムシ成虫発生消長（中津川市千旦林子察灯）

3 防除対策

(1) 耕種的防除

ほ場の土中を越冬するため、ロータリー等で耕起して、幼虫の生息場所となる土壌を粉砕する。また、幼虫をほ場内で越冬させないため、収穫時に規格外や被害を受けた果実は集めて処分する。

(2) 薬剤防除

果実に侵入してからの幼虫に対する薬剤防除は、効果が劣るため、羽化後から交尾・産卵前までの成虫期に虫体にかかるよう丁寧に薬剤防除を行う。